

---

# 美少年とそいつを嫌う少女

三笠エマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美少年とそいつを嫌う少女

### 【Nコード】

N4482T

### 【作者名】

三笠エマ

### 【あらすじ】

格闘技が得意な中学二年生の少女はだいつ嫌いな幼馴染の腹黒美少年とこともあるうに再会してしまう…。しかもそいつは突然猛アタックしてきて「自分のものにする。」とか言い出すし…。

## プロローグと思われるもの（前書き）

純粹な恋愛にしようと思っっています。しかし少年がめちゃくちゃ暴走な予感もします…。ですが絶対に食い止めようと思っっています。

## プロローグと思われるもの

「ふっ、みずちゃん、まだいるのかなあ？」

金髪に茶色のくりくりとした瞳、きめ細かい白い肌を持つ可愛らしい美少年がそっぴいなながら電車から飛び降りた。

「きつとびっくりするだろうなあ、みずちゃんは。」

そう楽しそうにくすくすと笑いながら少年はそう言った。それから顔がにやっとなった。

「そしてあのこは嫌がるだろうね……。だってあのこは僕のこと……。」  
そして甲高く顔に似合わない低い声でよくいると思われるテレビの某長寿アニメの悪者っぽく「ハハハハハハ……。」と笑い出した。その様子にギョツとなる彼を通りすがりに見た女性。そのことに気づいた少年はさつととびつきりの特上スマイルでその通りすがりの女性にはほえんだ。その微笑みで一気に目がハートマークになる女性。その途端、少年はさつと女性の横をさつと通り過ぎた。女性は惜しそうな目で彼を後ろから熱い視線でジーツと見ていた。

それから少年は雨の中、駅のバス停（駅から約二分半）までさつさと歩く。そして少年はぼつりとたった一人しかいないバス停でつぶやく。

「今回は絶対に逃がさないよ、みずちゃん。だから待っていてね、かならず僕が君を捕まえてあげるから……。絶対に今回こそ逃げないでね……。」

柔らかい口調だが、声は完全に殺気を帯びている、否、凄くどす黒いオーラを帯びている。結局どちらにしても犯罪が起こりかねないことには変わらないのだが。

だから誰か警察を呼ぶべきなのだが、残念ながらそこには誰もいなかった。まあ、少年も誰もいないからあんな声で一言（と呼ぶべきではない長さだが……）つぶやいたのだろうか。

そして少年はそのまますぐに来たバスに少しぬれながら乗り込んでいった。

「明日が楽しみだなっ、みずちゃん、更に可愛くなっただらうなあ…、くすっ。」

そう楽しそうに悪魔の笑みを浮かばせてつぶやきながら…。

その後、バスは駅から少しはなれたとある町に着く。そこからこの物語は始まっていくのだった。

## ブログと思われるもの（後書き）

初めまして、三笠エマです。新参者なのでどうも文章が下手と思われませんがどうかそこらへんは読んでくださる方には広いお心で許していただけると嬉しいです。そして感想をいただけると更に嬉しいです。

さわやかな風とともにきた大っ嫌いなあいつ（前書き）

エピソードの方から見てくださった方、本当にありがとうございます。

というわけで早速本格的にはじめさせていただきます。

しかしこれでも中三なので受験中はできないと思いますがどうか広いお心でお許しください…。

さわやかな風とともにきた大つ嫌いなあいつ

「ふわあ〜っ」

ゴールデンウィークが終わり、五月のさわやかな風が吹く朝。こんなときは学校の中二（まあ、どのクラスでも嬉しいだろうが）の教室の一番後ろの窓際という席は大変嬉しいものだ。と言うわけで運よくその席になった少女 林原水希は気持ち良さそうにあくびをするのだった。

「こんな日は本当に平和に終わってくれそう。」  
水希はそう一言、幸せそうにつぶやいた。そしてまた一言つぶやいた。

「今日は誰も喧嘩売ってこないよね…。」  
この少女 林原水希は格闘技が得意な少女だった。しかし常に二つの花飾りをつけているロングの可愛い髪型やその華奢な体格や150cmの身長からはそんなことは全く想像もつけられないのだが、なぜか不良に絡まれやすい為、つい得意の格闘技でその不良達を倒してしまうのだった。そしてそのことが不良達に知れ渡ってしまい、よく喧嘩を売られたり、不良達に更に絡まれるようになってしまった。

このことが今の水希にとっての一番の悩みだった。

「にしてもやつぱ良いよね、この席…って、おはようっ、奈穂！」  
長身の黒い髪のおとなしそうな少女が常に朝早いため、一人きりだった水希だけいた教室に入ってきた。彼女の名前は小川奈穂。水希と親友と言える存在で、美少女でその清楚な姿と顔立ちから男子によくもてている。しかもなおかつお嬢様だが鼻にかけないその性格から女子にも好かれている。

「おはよう、水希。」

可愛い声で笑顔でそう言う奈穂。かばんを置くと彼女は水希に話しかけてきた。



「水希、知ってた？今日、転校生が来るんだって。確か男子なんだって。」

「へえ、そうなんだ。知らなかった。で、奈穂はその男子見たの？」

「ううん、まだ。だけれど確か朱音が見たんだって。」

「ふうん、でその男子どんな感じだったの？」

「それがね……」

と奈穂が言いかけたときに勢いよくばんつとドアが開いた。

「おはようっ、水希、奈穂！私は今日も元気だぞっ！」

そう言っただけにも元気はつらつうという感じの少女が教室に入ってきた。彼女こそが転校生の男子を見た朱音である。運動神経がよく、明るそうなその笑顔とさっぱりとした性格から男女問わず人気者である。しかしそれと同時に情報を集めるのも早く、女子達のさまざまなことの情報は多くは彼女から入ってきた。

「おはよう、朱音。」

水希と奈穂の声が八モる。朱音はそれと同時に勢いよくかばんを置き、それから一秒もたないうちに二人に話しかけた。

「二人とも転校生の男子の話していたんだよね。」

こくと頷く水希と奈穂。

「で、どこまで言ったのかな、奈穂は。」

「えーと、転校生の男子を朱音が見たと言う所まで。」

「じゃあここから先は二人とも知らないんだよね。奈穂にも言っていなかったもんね、どんな感じだったかっていうところまでは。」

そう奈穂に朱音が振ると奈穂は頷いた。

「あのさ、驚かないでよ。絶対にびつくりするはずだから。」

「分かったよ……」

水希と奈穂はそういった。それを聞いてから朱音は話し始めた。

「実はね、すごく美少年だったの。しかもとても可愛らしいんだよ……。」

うつとりとした目つきでそういう朱音。それに便乗して目を輝かせる奈穂。この二人、実はミーハーである。それとは裏腹に冷めた表

情の水希。彼女にとって美少年とは苦い思い出をよみがえらせるだけで憧れとかそういう思いを抱くことはなかった。

「で、もっと詳しく教えてっ、朱音！」

「でさ、それが金髪でさ、しかも柔らかそうな髪なんだよね。」

金髪で柔らかそうな髪と言っのを聞いて水希は更に冷めた。彼女は金髪で美少年と聞くとただの美少年よりも更に嫌になる。

「でね、目が本当にくりくりとしているの。で茶色っぽいんだよね。」

「本当っ！」

更に気分が悪くなる水希。さっきの条件に更に茶色のくりくりとした目という彼女にとっては憎悪を浮かばせる要素が追加される。

「で、肌が凄く綺麗なの。日焼けひとつしていない本当に綺麗な肌でさ。男子にしてはもったいないほどで…。」

美少年で金髪でくりくりとした茶色の瞳で白い美肌の持ち主で…。

それを想像すると水希はぞっとしてきた。彼女の思い出したくもない人物とこれらの四つ全てが合っていた。水希はまさかね…、と思いつながらも話を更に聞く。

「それから声もとても可愛らしいの。あんな声で甘えられたらいいところだよな。」

「うわあ〜っ、楽しみだね…。」

感傷に浸る奈穂と朱音。可愛らしい声をあの四つの条件と組み合わせると完全に…。

それを考えると水希は悪寒がして頭痛がし始めた。

それから朝礼が始まるまではずっと女子はその話題で持ちきりだった。そしてその話はどんどん時間がたつにつれヒートアップしていった。と、同時に水希の悪寒と頭痛も更にひどくなっていた。

水希は考えていた。ああ、もし転校生があいつだったら私の人生はもう終わってしまう…。そして家族の顔が頭の中に浮かんでくる。

お母さん、お父さん、産んでくれてありがとう…。水花…、生意気

な妹だったけれど可愛かったよ、次に会うときは絶対に仲良くしようね…。それから水希の頭の中では人生が走馬灯のように走っていたのだ。そして最後にああ、短い人生だったな…。と水希はそう思った。

それから女子にとっては嬉しく、水希にとっては忌々しいチャイムがいつもどおりに鳴るのだった。

そしてそれと同時に担任が入ってくる。全ての音が女子と水希（水希も女子だが）には聞こえないまま、時間は過ぎ去っていく。担任はそのことに気づかないまあいっそもより長い話をしている。それから担任はついに言ったのだ。――

「知ってるかもしれないが、今日我がクラスには転校生が入ってきた。――」

男子もざわざわとしてくる。女子は今か今かとうずうずしている。そして水希からは生気が抜けている。それから担任は更に進める。

「では入ってきてくれ。――」

がちゃ、という音がして同時に教室に入ってくる金髪でくりくりとした茶色の瞳で白いきめ細やかな生まれたてのような肌を持った美少年が教室に入ってきた。と、同時に女子から湧き上がる嬉しい悲鳴。男子から沸きあがる歓喜の声。そして白くなって固まった水希…。これらの事がたった一秒の間に起こった。それから美少年が口を開いた。

「初めまして、篠河空です。どうかよろしくお願いします。――」

笑顔でそういう美少年 篠河空。その笑顔に女子はハートを打ち抜かれた。男子は不覚にもドキッとなった。中には惚れかけた男子もいたとかいなかったとか。

「篠河は転校してきたばかりでまだこの学校については分からないだろうからみんな仲良くしてくれ。――」

「そんなこと言われなくても仲良くしたい。ほとんどのクラスメートは思った。そして担任は言った。

「席は…。――」

この言葉に女子は全員目をつぶった。一人を除いてはぜひ隣にと。例外の一人は絶対に隣には来るなど。そして担任が運命の言葉を言った。

「じゃあ林原の隣で。いいか、篠河？」

「はい。」

女子から沸き起こる悲鳴。しかし空の笑顔を見てそれらはなんとか止まった。そして水希の隣へ向かう空。彼が通るたびに女子達はドキドキする。その女子達全員に笑顔を向けていく空。そして水希の隣の席へ座った。それから彼女にこういった。

「また会えたね、みずちゃん。」

そう言つてとびつきりの笑顔になる空。正反対に青ざめていく水希。それから空は彼女の耳元でこう囁いた。

「今度は絶対に離さないし逃がさないからね。僕のみずちゃん。」  
こうして水希にとっては嫌な日々が始まるうとしていた。

さわやかな風とともにきた大っ嫌いなあいつ（後書き）

とてもながかったですね、これ…。こんなに長いのははじめて書き  
ましたよ…。

でもとても楽しかったです。ちなみに篠河空君が言わなくても分か  
ると思いますがエピソードの少年です。では次回も誰か読んでくだ  
さることを願っています。

では

にしてもなぜ私はこんな所に…（前書き）

えー、中間テストが終わり、やっと小説書けるぜ！とハッピーな三笠です！

今回はあとがきがちょっとスペシャルになる？かもしれない。

にしてもなぜ私はこんな所に…

隣の席に嫌いな人が来る…。これほど嫌なことはないだろう。しかもその席をうらやましがめる人が多数いたのならその人たちにぜひ席を譲りたい…。水希はそう思った。

「なんでこんなことに…。」  
ぼんやりとしていて授業もつい上の空で聞いてしまう水希。一方その原因である空は上機嫌で授業を楽しそうに聞いているのだった。

「なんでこいつはあんなにも幸せそうなのよ…。私の幸せを返して欲しい…。」

しかもその嫌いな人が自分の事を好いているとなると凄く大変なことになると思われる。

なおかつ空みたいな某少女マンガ雑誌によく出てくるような美少年だったら普通その隣にいる女子は文句をいわれやすくなってしまふ。「私だって好きでこの席になったわけではないんだけれどな。あー、女子の嫉妬ってうざ。」

そうつぶやいた後に隣の席から可愛らしい声が聞こえた。

「みずちゃんだって女子じゃん。だから僕のファンの女子の嫉妬はうざい、と言うべきだと思っただけ？これ間違っている？」

突然に耳元に話しかけてきた空に驚いて一瞬声を出しそうになったが水希は我慢した。

「ねえ、聞いているの？みずちゃん。ねえ、ねえ？」

「……………」  
水希は話を聞いていたが応える気がなかったので無視をした。水希は女子の嫉妬、いや空のファンの女子の嫉妬よりも空がうざいと思った。

「ねえ、ちょっと聞いているの、みずちゃん？」

しかしあまりにもしつこすぎるとさすがに人間無視ができなくなってしまうものである。なのでつい水希は空の耳元で…

「篠河空！あんたがいちばんうざいつ！」

と大声で叫んでしまったのだった。そして言ってしまった後に気づく水希。時すでに遅し、すでにクラスメート全員アンド社会の先生にその声は聞かれていた。

「ちよっ、林原さん、空君になんてことを…。」

「林原、怖すぎ…。」

「空君、かわいそ…。あんなこというなんて…。いくら自分よりも可愛すぎるからって嫉妬はひどいわよ。このブス女ツ！」

全く状況を理解せずに勝手な想像で水希を批判するクラスメート。こういう時、周りは原因ではなく騒ぎを大きくしてしまったものが一番悪いと決め付ける。もちろん、こういうのは一番悪いと言われってしまったものにはとても腹がたつモノである。なので…、当然水希は腹を立てた。しかしそれ以上は彼女は何も言わなかった。しかしその後も約一分半、水希を責める声が聞こえた。その時、

「林原さんは何も悪くないから皆もうやめてっ！悪いのは僕だし…。」

とエンジェルスマイルで空はクラスメートに微笑んだ。もうこれを見るとほとんどの人は怒りの感情をなくす。またゲームだと戦意をなくすらしい。

「篠河がそういうんなら良いんじゃないかねえ。」

「空君、やさしい〜。」

「林原さんってこんな優しい空君の隣にいるなんて罰が当たるわよね。」

完全にだまされていくクラスメート…、と水希は思った。彼は決してほとんどの人〃水希以外には本性を見せなかった。それは彼の両親にもそうで、彼が悪魔の表情になるのは水希以外の人がいる所では全く起こらなかった。しかし少しでも二人きりになってしまつとすぐに彼は悪魔の微笑みを浮かばせ、暴力などはしなかったが女子の嫌いな人には奪われたくないファーストキスを奪ったり、お菓子を取ったり、好きなものを壊したりというひどいことを水希にした



のだった。このせいで水希は小さな頃から我慢とか理不尽とか人生とはそんなに甘いものではないと言うことを思い知らされたのだった。なので彼女は彼を全く信用したことが全くなかった。そしてその後約二十分後に社会の授業は終了するのだった。その後水希は一時間、教師に体調不良を訴え、保健室で休むのであった…。

「空君っ！転校前の学校はどんな感じの学校だったの？」

「空君の好きな食べものって何？」

「空君の好きなタイプってどんな人？」

女子が昼休みになったとたんに空の机へと群がってきた。これぞまさしく欲望にまみれたハイエナの群れと言う所だろう。水希はちょうど本を読んでいたのだがこれでは全く集中することができない。と言うわけで彼女は図書室に行こうとした、のだが…。

「林原さん、僕に学校案内して？」

「えっ、それなら私が行ったほうがいいわよ、空君。」

「いや私のほうがいいよ、林原さん、性格悪いでしょ？」

「そうよ、危ないわよ、空君。」

水希的にはここは他の女子に頼みたい。だが空は水希をニヤツと見て、可愛らしくこういった。

「え、だからでしょ。せっかく同じクラスになったんだし全員と仲良くなりたいたいから。だから林原さんとも仲良くなりたいたいんだ。」

こうして更にクラスメートのところが盲目の女子達はだまされていく。

「空君…。優しすぎるよ。」

「さすが空君。自分のことを怒鳴った林原さんにも優しくしようとするなんて…。」

「普通、自分にひどいことをした人と仲良くしようとしなはいはよねえ。」

口々に空を褒め称える空信者の女子達。目がハートマークになっていてうっとりとしている。

それから空は

「だから今から二人きりで学校回ってくるからね！話はまた後でね！」

と言いながら水希を文句が聞こえてくる教室から手をつないで連れ出した。これは水希にとっては凄い迷惑なのだが文句を言ったらまたなんかされるのではないかと水希は怯えた。そして案の定、水希が嫌がる二人きりというシチュエーションは出来上がるのだった…。

にしてもなぜ私はこんな所に…（後書き）

えー、二回目ですね。にしても空は女子の敵ですよ、本当は…。ちなみに欲望にまみれたハイエナが群がるとはバーゲンセールのと きなどにも私は使います。だってどう見たって物欲で動いているんですから。ちなみに今回の群がりは色欲か性欲の欲であると思われるます。まあ、ひどい言い方とは私自身でも思っているんですけどね（苦笑）では1700アクセス突破スペシャル（？）企画、二人のプロフィールを書きます！（いらねえだろっ）

林原水希

誕生日6月27日。

血液型A型

好きな色 ローズピンク

好きなもの 友達、花の髪飾り、音楽を聞くこと

苦手なもの 篠河空、毛虫

特技 格闘技、不良を打ちのめすこと

篠河空

誕生日1月21日

血液型AB型

好きなもの みずちゃん、パフェ、女子

好きな色 空色

嫌いなもの 自分をぶりっ子と言う男子、みずちゃんにきらわれること

とまあ、こんな感じですね。にしてもなぜ空がこんなにも水希に執着心を持っているかと言うことはこれから明かされていきます。では長くなってすいません、なあとがきでした！

で、なぜこんなところにあいつは私を…？（前書き）

お気に入りに入れてくださった方に本当に大感謝している三笠です。私みたいなものの駄文を読んでくださるなんてあなた方は神様ですね…。また1000人をユニークでも超えていてびっくりしました…。本当にありがとうございます！そして誰か感想を書いていただけたらとてもありがたいです。

で、なぜこんなところにあいつは私を…？

「ちよつ、空。あんた、私に学校の案内をしろって言ったわよね？」

「うんつ、そうだけれど？」

プルプルと震える水希。それから大きく息を吸って彼女は思いつきり叫んだ。

「なんで、屋上なんかにいるのよおおおおっ！」

そう、そこは屋上だった。彼女は学校案内をしてと空にお願いされ（強制的に連れて行かれたが正しいが）、学校を案内することになった。しかし空は嫌々ながらも案内しようとする水希を引っ張って屋上まで連れてきたのだった。

「なんでなのっ！屋上なんて見なくていいでしょ！ってというか学校案内して欲しいんでしょ、空は。」

「アハハ、アハハハハハ。」

「な、何がおかしいのよ。」

それを聞いた空は笑うのをやめて、

「何言ってるの、みずちゃん。オレはそういうこと事前に見るタイプだろ。」

完全に口調が変わって、またそれと同時に可愛いと思われやすい声から急に大人びた声になって空はそういった。それにぞっとする水希。なぜなら水希が空に一番最後に会った時はこんな声や口調なんてしなかったからだ。

「みずちゃんは甘すぎるよね、本当にさ。だってそうでしょ、みずちゃんってガード固いと思ひ込んでいるけれど実はガードってあまりないんだよね。」

それから更に続けていく空。

「つまりみずちゃんって落とそうと思えば落とせるよね。いつだって強い人間のふりしてさ、本当はとっても甘いあんみつに生クリームとホットケーキのシロップをかけたぐらい甘いもんね、考えが。」



よ)もう怖くて近づけないようにしようと思っていたのだった。しかし、まさか空が喧嘩が強くなっていてなんて、いや、ここに転校してくるだけでも予想外だったのだが、想像すらできなかったのだ。これじゃあ彼から逃げることなんて全くできないじゃないか。私は凄く危機状況にあるのではないか、まさに四方八方ふさがれたウサギではないか、と水希は思った。

「さてと、みずちゃんをどうしようか…」

キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン。全国共通のチャイムがその時鳴った。それを聞き、舌打ちする空とほっとして胸をなでおろし安堵の表情を浮かべる水希。それから急に空は笑顔になって水希に言った。

「じゃあ続きは放課後ね。ちなみに逃げたら…、どうなるかは分かっているよね？」

「んなの知るかつ。」

そして空は水希の手をつかむ。

「ちよっ、いきなり何するのよ。」

それに空は当然のこのようにこういった。

「決まっているでしょ、教室まで皆に見せ付けるためだよ。こうしたらみずちゃんを狙う男子はいなくなるはず。」

そして笑顔でエヘッと笑う空。水希はこれからの展開を恐れながらも空が怖くて何もいえなかった。

その後、廊下で女子達の陰口を聞きながら水希は空に手をつながれたまま教室に行くことになってしまった。ちなみに空の表情はとも楽しそうであるで天使のようだったらしい。そして水希の表情は当然のごとく、生気のない表情だったらしい。そのことに気づかず、ほとんどの女子は水希をののしる。

「なんなのよ、あの女。たいして可愛くないくせに。」

「あのブス、三限に空君に罵声を浴びせたそうよ。」

「それなのに空君に手をつながせているのよ、最悪の女ねー。」

「空君、かわいそ過ぎるわよ。あんなブス女に手をつながされて。」

あんたら、勝手すぎるだろ、人に気も知らないくせに…、と水希は思ったが言い返せる気力もなく、ただ黙って聞いているしかなかった。にしても中学生の女子の情報力は凄いものだ。中学生の女子とは話に尾びれ背びれをつけてその人のプライバシーを考えずに悪口を言うのだ。ちなみにこれは自分達が大人びていると思いついている精神年齢が低い女子達がよくするものだ。賢い人は人の悪口なんて言わないのだから。要するに水希達の学校の水希の学年の女子は低レベルと言うことなのだ。なのでこれは決して全ての女子中学生に通じていることでは決していない。そんな女子達を無視して空は

「周りがるるさいね。きつと僕達がラブラブだから冷やかしているんだろうね。でもこんなのぜんぜん気にしなくていいんだからね。」

あんたが原因だろ、と水希は内心思った。そしてそれと同時に更にひどくなっていく陰口。

「空君からはなれなさいよ、このブス女。」

「何で更にくつつくのよ、空君からすぐに離れなさいよ。」

「いい加減にしなさいよ、あんたなんて空君とは全くつりあっていないのよ。」

女子というものは怖いものだ。状況を自己流に都合の良いように解釈をして、一方的に何の根拠もなしにまくしたてるなんて…。そしてとうとう水希はきれてしまったのだった。

「いいかげんにしなつ、あんた等うるさすぎるんだよッ！」

それから水希は勢いよく空から自分の手を離れた。

「もういい加減に離して！私があんたなんて大ッ嫌いなんだから。」

それから水希は教室へと猛ダッシュで走った…。



で、なぜこんなところにあいつは私を…？（後書き）

これには結構な続きがあります。にしても三話目でしくじってしまった…。これからは第何話なんて入れません。混乱した方がいたらすいません。では

放課後だって地獄を見なければ…（前書き）

こんばんは、どうも受験生の中学三年生、三笠エマです。  
更新が遅いですが、本当にすいません…。

## 放課後だって地獄を見なければ…

昼休みをすべてとられた拳句に空のせいでほとんどの女子に敵対視されてしまうことになった水希は空のせいでぐったりとし、頭痛まできていた。

「なんで私がこんな目に…。」

その言葉には空への怒りとか女子たちへの呆れとか神様への人生に對しての理不尽さとかその他いろいろと負の感情が入っていた。

「私、前世でいったい何をしでかしたんだろうか…。」

それは神のみぞ知ることだ。にしてもそう思っているのは水希だけで普通の女子にとっては素敵な美少年に好かれるというのは王道であり、夢でもある。またやはり某少女漫画雑誌で好まれる展開でもあるといえよう。その読者の少女たちに夢を与えるために…。なので神にとっては前世で水希が善い行いをたくさんしたのでその褒美として与えているかもしれないおいしい話の可能性もあるのだが…。「にしても理不尽すぎるわよ…。なんで私だけがこんな目に合うんだろう…。」

そして長くはあーつと憂いの表情を浮かべたため息をつく水希。とその時、隣で空が

「かわいい子にはそんな顔は似合わないよ。スマイルスマイルっ。」とかわいらしく言ってきた。通常この攻撃でほとんどの女子は体力が0になると思われる。しかし水希にとってはこれは単なる嫌がらせになっってしまうのだった。つまりはたから見ればまさしく猫に小判、豚に真珠な状態なわけである。これはかなりおいしすぎる話に違いない、水希以外の女子から見れば。

だが、水希にとってはイライラを増幅させる言葉でしかない。というわけで小声で

「誰のせいでこんなにもイライラしていると思っているのよ、空っ！」

「え、誰のせいなのかな？」

こいつ、絶対知ってそういつてやがる…、水希はそう思いわなわなと震えた。しかし三限目の事故があるのでそう易々と切れるわけにもいかなかった。なので

「決まってるでしょ、空、あんたのせいよ。」

と、小声で怒気が入っている声で耳元でささやいた。それに対して空は

「え、なんで？なんで？」

と答える。水希にとってはこの答えはめっちゃイライラする話しかし空にとってはイライラする水希を見ることはとっても楽しい趣味。これは得は上位のものしかとらないマルチ商法と同じようなものだ。にしても空は水希を本当に好きなのかともこういう行動をしていると疑わしくなるのだが…。

「空のすることは全部私にとっては嫌がらせでしかないの、分かる？私にとっては空は悪魔、疫病神、〇〇ノートに名前を書きたい人物、それでしかないのよ。」

〇〇の中に入る言葉は大体の人がお気づきですよ。しかしここではそのネタを出したら危ないので出さないことにして伏せておきました。にしても普通はこのノートに名前を書かれると聞いたら嫌がるはずだが、空はなぜかそれを聞いてくすつと笑った。

「な、なによ…。」

「いやー、まさかみずちゃんやんでれたとはね。いいよ、僕はみずちゃんになら本望だよ。それぐらい愛してくれていたなんてかんげきしちゃった…。」

どれぐらいポジティブ思考なんだろう、こいつ…。水希はそう思った。はつきりいつてこれを言った人には精神病院にぜひ行っていただきたい。

「どれだけあんたはポジティブ思考なのよ…。」

呆れて水希は怒ることさえもできなかつた。これは普通の反応だと思われる。

「だからさ、僕のこと、こ…うががががががががが。」

これ以上言わないでいただきたい。この小説ではその言葉は禁止されているので。というわけで強制的に三笠に空は口をふさがれた。

「ぬあ、ぬあんで…。」

プロローグに書かれているから、これが正答だ。悪いが作者は黒い表現とかはこの小説では使いたくないので。

「……………」

水希は呆れて何も言えなかった。そしてその後、チャイムが鳴った…。

「さようなら、日常…。こんにちは、非日常、そして地獄の日々…。」

水希はそうさびしそうに切なそうにつぶやいた。このシーンは普通、主人公が好きの人に振られてしまった時の表情だが、彼女は平和だった日常から突き放される悲しさでそんな表情をしていたのだった。「えっ、どうして？これから僕が来たからみずちゃんは絶対に幸せになるよ。だから幸せな日々が待っているんだよ、それなのに嬉しくないの？」

「そ…ら……………」

「ね、だからこれからみずちゃんの日常は幸せに…。」

「あんたがすべて悪いんだよっ！」

「ああっ、僕が来て恋の悩みができてしまったから？」

「絶対そんな訳がない。私はあんたが来るということが一番恐れていたの。幼馴染同士がたまたま再会して恋をはぐくむなんてストーリーは二次元の世界にしかないのよ。まずいい？幼馴染が結ばれるなんて現実ではあんまりありえないから。」

「でも僕たちはそれができると思うよ？」

「いや、無理、絶対に無理だから。」

「いや二人の愛なら絶対にできるさ、そんな現実の常識を覆すなん



放課後だつて地獄を見なければ…（後書き）

なんか途中から訳が分からなくなってきました、三笠です…。なんか私が精神病院に行ったほうがいいのかもしれませんね。よく部活の人に精神科へ行けと言われてましたしね…。

そして感想を書いてやろうという人はお願いですからどうか書いてください。

では

放課後なんてもうトラウマだ…（前書き）

最近小説の更新をしていなくてすみません！



放課後なんてもうトラウマだ…

春の心地よい午後の風が吹く三時の屋上。そこにかわいらしい容姿の少年・空と長い髪に花の髪飾りを付けた少女・水希が向かい合うように立っていた。彼らの間の温度はとても違う。空のほうからは幸せそうなオーラが出ていて暖かいが、水希のほうからは怒りのオーラが出ていて、寒い。オーラに温度はないはずなのだがこう感じさせてしまうぐらい、二人の表情や様子は違っていた。

「結局来てくれたんだね、みずちゃん。」

「あなたが脅迫まがいの言葉で私を脅すからでしょ…。」

嬉しそうに言った空に冷たくピシツと言い放つ水希。彼女の心にはイライラと憎しみと怒りと辛さと自分のふがいなさなどのマイナスの感情しかない状況だ。

「えー、そうだったっけ？僕、覚えていないやー、あはは。」

お気楽そうに明るく言う空。彼の心には幸せとかみずちゃんをぎゅっとしたいとか、キスしたいとか、とりあえず妄想やプラスの感情しかない。

「違うでしょ！あなた、何嘘ついてんのよ！私は全然ここに来たくなかった。むしろ避けたかった。そしてあなたに会いたくなかった。」

「あ、ばれた？えへへへ。」

「なによ、そのぶりっこ。悪いけれどやめてくれない？私にはそういうの全くきかないから。むしろ逆効果だから。余計嫌いになるから。」

「もうツンデレなんだからあ、みずちゃんはっ。」

「やめて、虫唾が走る、鳥肌が立つ、吐き気がする、頭痛がする、腹痛がする…。」

空に対して水希の体と心は素直に拒否反応を示す。でもまだじんましんがするよりはましなのかもしれない。けれどかなり重症という

ことには変わりはない。

「ひどいね、みずちゃん。もしかして僕に長い間会えなかったから嬉しさのあまり、そうなったの？」

「どれだけこいつはポジティブで自己感情主義で鈍感なんだろうか…。水希は内心あきれつつも自分がその相手に好かれてしまったという不幸を嘆いた。

「なんでそう思うのよ、空、あんたは…。」

「だってみずちゃんに避けられていることは分かるもん。だからせめて冗談でもそういわないとちよつと辛いところあるからさ…。」  
切なそうに空は言った。その言葉を聞き、水希は笑顔で言った。

「私が空のことを避けていると分かっているんだったら近づかないでくれるかな？」

「それは無理です。」

きつぱりとそう言い切る空。

「僕はみずちゃんがいないと生きていけないから。」

「あっそ。別に私は空が生きていけなくてもどうもこうもないけれど。」

水希にとっては空はいないでくれたほうがありがたい存在だ。彼女にとって空がいることはマイナスにはなってもプラスになることは今のところ、いや多分将来でも一回もないだろう。と水希は思っている。

「へえ、強いね、みずちゃんは。僕なんて愛する人がいないと飢えてしまうタイプなんだけれどな。」

「そういうことをサラッと空はなんでいつも言うのだろうか、と水希は思った。そしてなぜそんなことを言えるのかが妙に気になったので、聞いてみた。

「なんで空は普通の人が恥ずかしくて言えない言葉を普通にさらさらと言えるの？」

「だって素直に気持ちはずたえないと相手には絶対に伝わらないじゃん。」

「でも私に言っても気持ちに通じないと思うけれど？」

「たとえそれでも僕は絶対にあきらめないからね。」

そう言った空の表情にちよつと水希はドキツとなった。そう空に対して自分が思ったことに水希は戸惑った。なんで空に対してそう思ってしまったのだろうか。

「あれ、みずちゃん、どうしたの？」

そんな水希に空は気づいてそう聞いた。

「な、なんでもないっ。」

ちよつと顔を赤くしてそう言う水希に対して空はもしかして…、と思ひ、にやりと心の中で笑った。

もしかしたらみずちゃんをおとすことができるかもしれないと…。

そして水希に聞いてみた。

「もしかして一瞬、僕にドキツてなった？」

「なつてないっ！」

その時に一瞬水希がためらったのを見て、空はよっしゃあ、と心の中で叫んだ。しかしそのそぶりは見せずにこう続けた。

「えー、本当に？」

「本当です。」

それから空は

「本当にみずちゃんは僕に何されてもドキツとまらないの？」

「なるわけないでしょ！って何されてもって一体な…？」

そのあとの言葉を水希が続けられなかったのはいきなり空が『キス』をしてきたからだだった。その時に

はとつさのことに口に触れる柔らかい感触がなんなのかが水希は分からなかった。だが少し落ち着くとその感触がなんなのかに気付き、すぐにその感触から逃げようとした。だが空に体をぎゅうつと抱きしめられていたために逃げることができない。そこで水希は顔をそらそうとしたが、それは空によって封じ込められる。それから約一分後に空は水希から顔と唇を離す。

「ぶはっ、みずちゃんのセカンドキスゲット！」

嬉しそうな空に水希はいらっとしたが、なぜか怒る気にはなれない。

しかもふと思り返すと…

「ないないない、ありえないっ！」

そう、いやな気持が不思議なほどなかったのだった。

放課後なんてもうトラウマだ…（後書き）

ちよつと自分でもこつこつという感じになるとは想像が付きませんでした  
…。でもこれでもちよつとは恋愛ものに近づいたのかもしれないね  
…。感想いただけたら嬉しいです。では

ね、眠れない…(前書き)

大変更が遅れてすみません！

ね、眠れない…

「……どうしよう。」

水希はそうつぶやいた。ここは彼女の部屋。中学生の女の子らしいアイドルのポスター（主にジャニーズとか秋葉のあの世間で大人気のアイドルグループとか）やかわいらしいクマのぬいぐるみが置いてある。そんななかで彼女はぎゅっとお気に入りのぬいぐるみを抱きしめて悩んでいた。

「私、空に…き、キスを…。」

それをつぶやいてカアツとなる水希。いくらファーストキスを昔に奪われていたからと言って恥ずかしくないわけがない。中学生とはそういうものである。

「それにしてもなんで…。」

なんでどきどきしてしまったのだろう。とあとに続く言葉を彼女は心の中でつぶやいた。気持ちは疑問と恥ずかしいという気持ちと悔しい気持ちと…、それと訳の分からない気持ちで彼女の心の中はいっぱいだっただ。

「自分で自分がわけわからないよ…。」

水希は自分がまさかこんなにドキドキして、たった一つの行動でこつも悩む人間だとは知らなかった。なぜなら彼女はいつも明るく深く悩まなかったから。彼女は悩むんだっただけ行動しようというタイプの人間だった。

そんな彼女にとって空は天敵というだけであとは幼馴染ということしか考えたことがなかった。なのになぜ、こつも彼のキスひとつでこんなにもドキドキして悩むのだろうか…。

「もう訳分らないっ！」

もしも空が来たら本当はこんな感じじゃなかったに違いない。むしろこんで眠りながら空への対応策や対処法や撃退法を考えていたに違いなかった。なのにドキドキして悩んでいる自分がある。たっ

た一つのキスで…。 たった一つのキスで…。 その時水希は叫んだ。  
「そうよ、キスよ、キス！ あれは空からのキスがドキドキしたんじやなくってキスという行為にドキドキしただけなんだ！ なーんだ、そうだよ、だって私は中学生！ キスなんかされたらそりゃあドキドキするよね！」

水希は自分なりの考えで開き直り、すっかりとすつきりした状態になっていた。

まるでもう悩んでいたことなんて忘れていたように。 そして彼女はすつきりとした顔で眠った。

しかし、本当にキスという行為でドキドキしたのではなく、空からキスされたということとドキドキしたということとを彼女はあとで思い知ることになるとは知らなかった…。

打って変わって空はいろいろと作戦を練っていた。

「どうしたらみずちゃんを落とせるかな〜。」

そっぴいながら彼はキュッキュツとマジックペンで「みずちゃんをどうやって僕のものにさせるか大作戦ノート！」と書いていた。 …

はつきり言っつてネーミングがそのまますぎて、またなおかつネーミングセンスがないと思われるノートである。 こんなノートを作る人ははつきり言っつて中二病としか思えないのが現実である。 しかし彼のノートの内容は結構本格的だった。

「うーんとまずはー。」

彼はさらさらつとノートに作戦を書いていく。 その作戦の題名は「みずちゃんに変わったと思ひ込ませよう。」だった。 … 内容がそのまんまの題名。 その中身は単純にもうわかんと思うが「優しくなつたアピールをしよう。」今更それをしたとしても遅いと思うのだが彼には秘策があつた。

その次にもたくさんのことが書かれている。

「絶対にみずちゃんは俺のものにしてみせるからね…。」  
彼のノートにはそんな気持ちがあふれていた。



幼き日のおもひで 空の本音（前書き）

なんとなく書いてみたくなったので書きます……。珍しく今回は一人称で行きます。ちなみに本編のストーリー上にはそこまで関係はないと思います。

## 幼き日のおもひで 空の本音

「みずちゃん」

俺は幼馴染の水希をそう呼んできた。これは自分の水希を自分のものにしたいという欲望を抑える言葉だった。本当は彼女の名前通り「水希」と呼びたかった。しかし、水希と呼ぼうとすると自分の中で何かが渦巻くのが分かった。だから今まで言ってきた「みずちゃん」って。

俺は自分でいうのもなんだが外見がかわいらしい。ふわっとした金髪。白く雪のような肌。くりっとした瞳。これらは男子らしくなくて正直物心ついたころには好きではなかった。だが、水希はこの容姿だけはほめてくれていた。

「空って外見だけはかわいいのに……。」  
それ以来俺はどうやってたらかわいくなくなるか考えていた。ちなみにこの時俺は三歳。普通はこの年でそんなことは考えないだろうになぜか水希のその言葉一つで俺はどうやってたらかわいくなくなるか考え始めた。

でも自分の水希への接し方は全然かわいくなかった。彼女には彼女の大切なものを隠したり、彼女が好きな友達の前で恥をかかせたり。彼女のお母さんに彼女がしてしまったいけないことを言ったり……。今思えば彼女が俺を嫌いになってしまったのは当然だ……。そうして彼女の俺嫌いはどんどんひどくなり、俺を見たらすぐに逃げるようになった。そうなってから焦って近づこうとしたらことごとく毎回逃げられる。そして自分が嫌われているということの水希にやつ当たりしてさらに彼女に嫌われていった。

「今思えば俺ってバカだよな……。」  
好きな子だから意地悪したくなる。そんな気持ちはやっている本人

にしかわからないうちに。なのに意地悪をすることで水希に気持ちが悪く思っていた俺は相当な馬鹿だ。こんなんじゃ絶対に水希は振り向かない。

「にしても、あいつが好きになった人つていたっけ…。」

そう呟いてから俺は考えてみた。彼女が好きになったやつ…。思えばそういう奴いたな。

…確かあれは幼稚園生の時のこと。水希がまだ俺をそこまで嫌ってはいなかった時でまだ仲よくしてくれていた時のこと。彼女はとある男子を好きになった。確かそいつは…誰にでも分け隔てなく優しくて男女へだてなく優しくかった。そんな彼と当時から活発で明るかった水希は当然のごとく仲が良くなり、よく園のいろんな子達で遊んでいた。そのうちに彼女は彼のことがばかりいつも見ていた。

そのことに気になって俺はある日聞いてみた。

「みずちゃん、○○君のことが好きなの？」

…って。そうしたら彼女はひまわりのように明るく俺には向けない笑顔で

「うんっ！私、○○君のことが好きっ！」

と言った。その言葉に俺は心底イラッとしたが唇をかんで我慢した。そんなある日、俺は水希が好きって言ったやつに話しかけられた。

「空君、実は僕、水希ちゃんに伝えたいことがあるんだ。」

「え、なんで僕に？」

内心イライラしていたが我慢して聞いた。

「実はその…僕、水希ちゃんが好きなんだ…。でも水希ちゃんってとてもかわいいでしょ。だから水希ちゃんって誰が好きなのかなって…。」

「だから何が言いたいの？」

めっちゃくちゃ俺はイラついてたがそいつは全くそれに気が付いていなかった。

「だから空君って水希ちゃんの幼馴染だっけ聞いたから、その…水希ちゃんの好きな奴聞いてきてくれない？」

「お前は水希に好かれていること知らないのかよ。水希の近くにいてそれでもまだ手に入れられない水希からの好意。俺のイライラはとうとう爆発した。」

「もう知ってるよ。とりあえず〇〇君のことは無理して笑顔で遊んでいるって。」

口からそういう言葉が出た。その後、そいつは黙って泣いていた。そして…そいつは水希をさけるようになってしまった。その時、水希はとても辛そうでも一人で泣いていた。だってそいつは水希がいるときはみんなの遊びに加わらず、水希が遊びから離れたとたんに入るのだから。そのあと、俺がしたことを水希は彼の友人から聞いた。その時、彼女は…

「空なんて絶交だ！大っ嫌いっ！」

と言った。それから水希は俺を避け、逃げ、嫌うようになってしまった。今思えばとてもひどいことをした。もし俺が正直にあいつに水希の気持ちを伝えてたらもしかしたら水希は彼がほかの園に行つたときに俺のことを好きになってたかもしれないのに…。

「でもそんなの今言っても駄目だよな…。」

「だってもう水希とは会えないだろうし…。」

その一か月後、俺は父さんが転勤するということを知った…。

幼き日のおもひで 空の本音（後書き）

プロローグの一月前の話です。正直空は書いていて楽しいやつなのでこういう話を書いてみたかったです。それに自分で整理したかったです、どうして水希があんなにも空を嫌うのかって。そこには何か原因があるだろうけれど、でも考え付かない…。この小説を書き始めた時にはそう思いました。でもなんとなく少しずつ形になってやっと最近考えたので書いてみました。にしても、こういうの苦手です…。

女子から売られた恨みはしっかりとお返しします。(前書き)

昨日のアクセス数を見てびっくりしました…。最初よりも来る人が多かったです。さて今日も書きます。

女子から売られた恨みはしっかりとお返しします。

空が水希の学校に転校してきてはや一週間。

空の人気は衰えることを知らず、むしろ他の学年にもそのルックスや女の子にやさしいという噂が広まり、一週間余りで彼は学校のアイドルへと化していた。

「空く〜んっ！」

「空君っ、今日はクッキー作ってきたの！食べて！」

「ねえ、一緒にお弁当食べない？」

そのような会話が空とその周りで常に起こっている。せめてその会話がやむのは授業中だけで水希は授業時間は今まで嫌いだったのだが今では学校生活の中で一番好きな時間になってしまった。

「今日もうるさい…。」

あの空が転校してきた翌日はとてもドキドキして空とどう顔を合わせようかと悩んでいた水希だったが、今ではすっかりと空の存在が早く離れてほしいという認識になってしまった。そして相変わらず水希に話しかけてくる空。しかし、彼は昔のころのように水希の嫌がることはせず、むしろ彼女が困ったときには助けてくれた。

たとえば、空が転校してきて三日目の日、水希はたまたま消しゴムを忘れてしまった。その時、彼は無言で水希に消しゴムを渡してくれた。この日はあられが降るのではないかと水希は疑ってしまった。だが、それからも意外に空はちょっととした良いことをしてくれるのであった。

「一体なにがあったんだろう…。」

水希にとってこのことは嫌なことでもない。まあ、空が水希に対して優しくしようとしてくれるのは何かあるんじゃないかとも疑いたくなるが、別に悪いことではないし、むしろありがたい。

彼女はその行為に隠された空の思惑を知るすべがないのだが…。

とまあ、このような感じで水希が案じていた空からのいじめ大量な

地獄の日々は免れたのだった。しかし、それよりも彼女には空以外からの意地悪をされるとは夢にも思っていなかった。

「あの子、いらつくよね。」

「そうよ、そうよ、だって最初の日に空君にどなったんでしょ。」

「やっぱり空君とあの子が隣なんておかしくない？」

「まるで美少年と魔女じゃない？あの意地悪魔女。」

「あつ、それ言ってる。」

「ねえ、私たちがさ…」

あいつから空君守らない？」

ある日、水希の下駄箱には手紙が入っていた。

「あなたのことが好きです。体育館で待っています。」と。

「いったい誰よ、こんなべたな手紙送ってくる奴は…。」

はあつとため息をつく水希。そしてこうつぶやいた。

「あの女子たち、勝手に変な誤解して…。」

喧嘩をよく売られている水希（設定だったの覚えていますよね？せつかくなので使います）。彼女にとって喧嘩を売られることは結構あった。なのでこういうべたな手紙をもらった時は喧嘩だと思っただろうがいいと彼女は思っていたのだ。ちなみにこういう手紙で本当の告白だったのは0件に対して、喧嘩の内容だったのは53件。

驚くほどの喧嘩の売られようである。ちなみにこういう手紙のパターンでは男子よりも女子のほうが多い。女子はこういうので普通同性がつけられるであろうと思っっているからだ。しかし、この手の売り方は水希には通用しなかった。

「大体字がきれいなよね…。男子だったらもつと汚い字だし。」  
要するに水希に喧嘩を売った人たちは大体は知恵がないのであった。

というわけで…

「げっほ！」

「ごわっ！」

「な、なによ、あんた…。」



水希は当然のごとく売られた喧嘩には容赦なく向かうという自分のルールから喧嘩を売ってきた空君大好きクラブのメンバーをたたきつぶしたのだった。目は鋭く光っており、笑顔はまるで悪魔のように黒かった。

「私を甘く見ていたあなたがわるいわよね？大体なんで私が喧嘩を売られなきゃいけないの？私は篠河君のこと嫌いだし、離れてほしいし。喧嘩を売られる筋合いがない。」

空君大好きクラブの女子の気持ち分からない水希。なぜ空に好かれていてだけで喧嘩を売られなきゃならないのか。彼女にとっては空は最近は優しいが、いまだに意地悪をされたことのほうが印象深い存在だ。

「その態度が嫌なのよ！私たちがいくらかわいくしていくからお菓子とか作ってきても彼は見るように見てないもの。なんであなたは私たちがいくら頑張っても手に入れないものを拒むのよ！私たちは空君が好きなのよ。」

女子にとって自分の好きな男に好かれている女は嫉妬と怒りの的である。それなのにそれを拒むなんていい度胸だと彼女たちは思っている。それなのに水希みたいな人が出てきたらどう思うだろうか。それは怒るのが当然。まだくっついてくれたほうが我慢できる。

「だから私たちはあんたが嫌いっ。なんであんたみたいにそこまでかわいくない女が空君に好かれるのよっ！」

その時、ちよつと低い男子の声が聞こえた。

「君たち、みずちゃんの魅力に気づかないなんて…。そういう嫉妬深いからオレは君たちのこと嫌いなんだよね。」

水希と空君大好きクラブの女子たちはその声の主を振り返って見た。

女子から売られた恨みはしっかりとお返しします。(後書き)

なんか訳分からない話になりましたね…。とりあえずこのような展開になるとは最初に書き始めた時にはまったくの想像ができません…。  
というか、空が優しくするなんて最初は考えていなかったんです。  
一体どこからこうなったんでしょうか…。

なんでこんな奴なんか！…（前書き）

二日連続投稿でどんどん見てくれた人が増えたことに感激を覚えた  
三笠です。学校のテストが終わったので投稿します！にしても注射  
痛かった…。

なんでこんな奴なんかに…

「君たち、みずちゃんの魅力に気づかないなんて…。そういう嫉妬深いからオレは君たちのこと嫌いなんだよね。」

ふと後ろを見ればそこには空がいた。しかし、今の彼は相当怒っているようで普段は見せない黒いオーラが漂っている。明らかに天使ではなく魔王と言ったほうがあっている状況だ。水希は彼がこのような状態を他の女子たちに見せたことに対して驚いた。一方、空君大好きクラブの女子たちは皆さん、状況がつかめず空なのかさえも理解していない。

「オレ、集団でいじめる奴って大っ嫌いであ。普通、こういうことしたら一対一でやるのが基本だよ。そんなの女子特有の性格の悪さがにじみ出ているよね。」

女子の群れは弱いから集まるようなものだ。自分だけでは戦うことのできないからこそ群れるのだ。と空は思っている。その点、水希は必要以上には群れず、自分のことをしっかりと守れ、なおかつ弱い者にも優しくかった。空にとってそこが水希の魅力だった。まあ、空にとつて水希の全てが魅力に見えるのだが。

「その点、みずちゃんは一人で何でもできてすごい。君たちとは大違いだよ。」

「……………」

急にほめられ、どうすればいいかわからない水希。彼女にとって空にほめられることは一生に一回あるかないかのことなのだ。一方、空君大好きクラブの女子たちは今、自分たちの前に立っている黒いオーラを漂わさせている怖い男子が自分たちの天使であこれがの存在である空君だということに気付く。

「…誰なのよ、この人…。」

「本当に空君…?」

「すごい怖い…。」

その声に空の耳が反応する。それから彼は黒いオーラを纏いながら笑顔で言った。

「自分たちのイメージで人のことを想像するのはこれ以上やめてくれる？オレは君たちの天使なんかじゃないんだからね。」

その声にびくびく震えながらうなずく女子たち。そしてファンの女子たちにこういう態度をする空を水希は初めて見た。それから女子たちは

「すみませんでしたーっ！」

「ごめんなさいっ、もうしませんっ。」

と言いながら退散していった。

その様子を水希は呆然と見ていた。それからそんな水希に話しかける空。

「大丈夫だった？みずちゃん。」

声が僕状態の空のものだった。その声はなんとなく優しさが漂っている。

「うん。空、ありがとう。」

素直に水希は言った。本当なら普通は言わないセリフ。にしても、空は一体いつから自分と女子たちを見ていたのだろうか…。水希は疑問に思ったので聞いてみた。

「そういえば、空、いつから私とあの女子たちを見ていたの？」

「ああ、それは最初から。」

「最初から？！」

最初からならなんで助けてくれなかった！もっと早く助けるべきだろう！水希はそう思った。これはふつつう当然の感情である。最初から見ているのだったら最初から助けてくれと。その答えを空は言った。

「だってみずちゃんなら余裕であの弱そうな群れているだけの女子倒せたでしょう？」

「うっ…、まあ、そうだけれど…。」

確かに空の言葉も一理ある。水希の強さなら空は大体予測できたは

ずだ。

「だからみずちゃんを見ていたんだ。多分、みずちゃんのことだから言葉だったら集団のほうで圧倒的だったし、その時に助けたほうがいいな、と思って。」

「だからってなんで助けに来てくれなかったの！最初の時に！」  
これの答えに空は意外にもきっぱりと答えた。

「だって戦っているみずちゃんって綺麗だもん。なんかあまりないよねそういう人。戦っているときに花が咲くタイプの人って。」  
内心、水希はちよつと嬉しかった。彼女はよく喧嘩を売られているため、かなり喧嘩や腕力には女子なのだが強い。なので怖い、強い、男女と言われることはあっても戦いで綺麗ということは言われたことがなかったのだ。なのでその空の言葉に照れながら水希は言った。  
「ありがとう……。」

しかし、その答えを言ったのはまずかった。空はその答えを聞き、いきなり

「で、助けてあげたからにはなにかお礼をもらっていいよね？」

と言ってきた。しかも声が低い状態に豹変して。水希は突然のことで戸惑う。

「なつ、なんでよ！こっちは助けられなくてもよかつたし、勝手に空が助けてきただけでしょ！なのになんでお礼をしなきゃいけないのよ……！」

「え、ふつう当然じゃない？でもまあ、いつか。今回はこれで許すよ。」

と言って水希の頬にキスをした。

「ひゃうっ！」

当然驚く水希。いきなりのキスは心臓にかなり悪いです。なので注意をしましょう。そしてそれだけして去っていく空。そして再び果然となつてしまった水希。

「空……。」

水希は思わずそうつぶやいたのだった。

なんでこんな奴なんか…（後書き）

今回の話はなかなか書かない話です。にしても書いて面白かったです。ちなみに今、知りたいのはこの話の感想です。実はいまだに皆さんがこの作品をどう思っているのかわからないんです。

なぜならこんな中学生が書いた暴走中学生恋愛小説は本当に面白いのか気になるからです。私の母曰くよく私の書いたものを読んでもれる人がいるね。だそうなので…。なのでごく皆さんの意見が気になるのです。

特に知りたいのは空の発言や作者の説明。ちょっと暴走しているところがこれらの部分には多いと思っっているので…。なのでなるべく言ってもらいたいです。すぐきになっていきますので本当にお願います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4482t/>

---

美少年とそいつを嫌う少女

2011年9月15日13時37分発行